

第九章 「これからの日韓交流」

一 「もうひとりの自分」の発見

日韓高校生の交流によって、今まで気がつかなかった「もうひとりの自分」を発見する機会が増えてきた。日韓高校生の討論会をもった時、印象的な意見がでた。

● 「日本では、頭の良い人が大学進学をめざす」

「韓国では、頭が悪くても大学へ行かないと就職できない」

● 「韓国では、教師の体罰は認められ、生徒も仕方がないと納得している」

「日本では、先生がひどいことを言うと、『うるさい』と言い返す生徒がいる」

● 「韓国では、二年間は軍隊に入ることが義務で、拒否できない」

「日本の自衛隊は希望で入隊するが、現在海外出兵の動きがある」

「これからグローバル化が進む中で、私は一人の人間として、日本人として、過去に日本がおこなってきた悲惨な行為やその真実を、広い目で知っておくべきだと強く感じました。」

韓国の先生が言われました。『歴史は語るものではなく、生きるものだ』と。自分の中で、すぐこの言葉が引っかかっています。でも今、私には、歴史が生きるということはどういうことなのか、まだわかりません。しかし、これから本を読んだり聞き取り調査などをしたりして、歴史が生きるということはこういうことなのか、きつとつかめると思います。

私たちは、すぐよくいきつかけと、この行事をつくりあげてくれた先生方関係者の方がたに、感謝の気持ちでいっぱいです。私も、そんなすてきな大人になりたいです！

津賀ダム調査では、ダム近くの山林にある朝鮮人墓地の供養をした。日本のこんな山奥まで来て工事をしていたことに驚いた韓国の高校生は「韓国の教科書で学んだ強制連行の学習では、日本の人がお墓を今も供養してく

このほかにも「北朝鮮問題」については、日本のマスコミ報道の過熱ぶりを、韓国の高校生は冷ややかに見ている印象をうけた。冷静に考えれば、日本へ強制連行された世代は、韓国の高校生の祖父母にあたる。強制連行によって生死さえ不明な朝鮮の人々がどれ程いるのかにふれようとする日本の報道は、明らかに「偏向」している。

ゼミ生も、次のような感想を書いた。

「実際に人に会って話を聞くと、自分のなかの常識が大きく変わりました。この時代、この時にしかできないことを、『今を生きる』ということ、この旅であらためて学んだような気がします。そしてこれから先、私たちがつながっていくことを願っています。」

「韓国へ行きたいと思うものの、頭の中は受験のことであらうだった。しかし、私はその選択を後悔していない。私たちの交流は、世界から見ると小さなものであっても、その努力こそ日韓の本当の架け橋になると信じているから。」

安藤真菜さん(当時幡多ゼミ会長)の「交流を振り返って」の感想が、高知新聞「声」の欄に載った。

れていることなど、思いもよらなかった。」と語った。

それに対して幡多ゼミ生は、「韓国の高校生が、証言者の話を集中して聞いている姿勢を見て、自分たちの身がひきしまった。」と言った。



「ともに学ぶ」幡多高校生ゼミナール

土佐清水市の海上にて